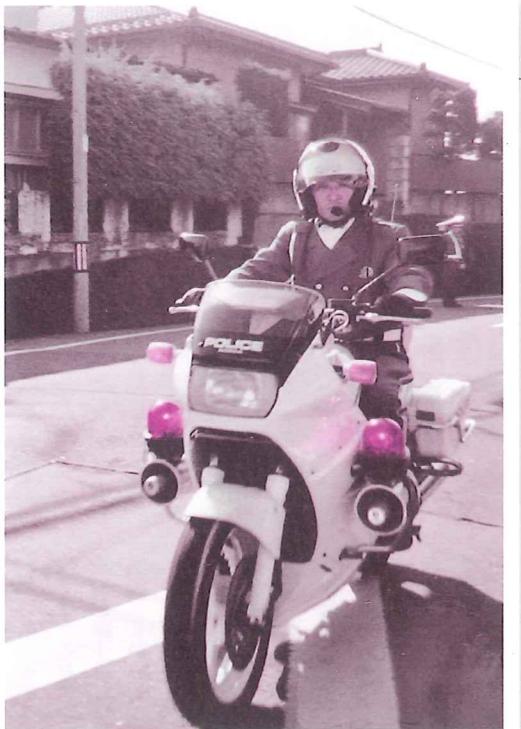


# 息を引き取る息子からのメッセージ

家族を失つたことで初めて知った警察官としての限界

文・柳原三佳 ノンフィクション作家



宮城県警交通機動隊で白バイ隊員として30代の頃の佐々木さん。白バイ仕様のホンダVFR750Fはいつも自分で完璧に整備をし、細部まで磨き上げていたという。

と、佐々木さんはこんなふうに時おり白バイ隊員時代の顔をのぞかせる。昨年、阿蘇でのツーリングの真っ最中に、あろうことか佐々木さんの目の前で大転倒し右腕を骨折してしまった私。それだけにその金言が古傷にちくりと刺さるのであった……。

## 理不尽な事故処理や すざんの実況見分の現実

佐々木さんが警察を退職したのは、東日本大震災が発生する直前の2011年3月、47歳のときだった。その後、

日本交通事故調査機構といふ会社をひとりで立ち上げ、現在は交通事故の處理に納得できない当事者たちのために全国各地を駆け回っている。

今年に入つてからもツアーバスの衝突事故や予見不可能な暴走事故など、大勢の被害者を出す悲惨な事故が立て続けに起こっているが、こうした重大事故の直後にテレビで放送されるニュース番組やワイドショーに「専門家」としてたびたび出演している佐々木さんの姿を見た人も多いのではないだろうか。

そのコメントはいつも的確で、被害者、加害者、双方の立場に配慮した誠実さがにじみ出ている。

佐々木さんは語る。

「本当に理不尽な交通捜査や事故処理が後を絶ちません。先日も大型バイクの死亡事故を検証してきたんですが、

警察の作った実況見分調書にはバイクの特性なんて全く加味されていませんでした。ご遺族のお父様はバイクに乗られた方なので、私が転倒直前のバイクの動きについて説明をするとすぐ理解してくださいました。でも、その真実をバイクに一度も乗ったことがない弁護士や検察官、裁判官に理解してもらうのは本当に難しいことです」

私は自身もこれまで長年、数えきれないほどの交通事故被害者や遺族に会い、づくられた調書をくつがえすのは至難の業だ。

元警察官の佐々木さんにとって、警察の交通捜査に異議を唱えることは自分がつらい作業ではないのだろうか。「たしかにそうですね。でも、今は何の迷いもありません。不思議なもので、自分は一生淮、警察官として敷かれたレールの上を定年まで過ごす……、そんな人生を歩むものだと思い込んでいました。でも、自分の家族に起こつたあの出来事は、皮肉にも22年間務めてきた警

## お父さんが帰つてくるまで もたないかもしない

人生を変えたその「出来事」は、何の前触れもなく突然に起こつた。

2010年10月25日、この日の朝、佐々木さんは職場の慰安旅行で訪れていた青森県の大間で朝を迎えた。

下北半島の北端に位置するその場所からは、晴れていれば津軽海峡越しに北海道の函館が見渡せるはずだったが、この日は雨が降つていた。

「第一報は家内からの電話でした。高3の息子、一尋(もとひろ)が事故に遭つて病院に運ばれたらしいという連絡でした。家内も又聞きの状態で詳しいことはわからぬ様子だったのですが、とにかくそのまま旅行を続けるわけにはいかなくなり、急ぎよ同僚たちとともに車で新幹線の駅がある八戸に向けて走り出しました」

担当の医師から告げられたのは、残酷な言葉だった。

「白バイには28歳から36歳まで乗つていました。当時は8時間の勤務時間のうち、練習に6時間くらいあてたるほど走り込んでいましたね。それでも、白バイ隊員が一般道へ出るときは、100の力があつても40か50くらいしか出していないものなんですよ」

穏やかな口調でそう振り返るのは、かつて宮城県警交通機動隊の白バイ隊員だった仙台市在住の佐々木尋貴さん(52)だ。佐々木さんはここ数年、交通事故関連の仕事だけでなく、私も参加している『生命のメッセージ展ツーリングクラブ』のメンバー同士として北海道や九州へのツーリングをご一緒させていただいている。磨きこまれたライディングテクニックは引退してもなお健在だ。現役時代

には、「警察緊急自動車運転技能普通車A級」「警察緊急自動車運転技能大型車A級」「警察緊急自動車運転技能二輪車(白バイ)A級」といった耳慣れないと特殊な免許を取得。ピンと伸びた背筋や独特的のハンドルさばきは一般的のライダーとはどこか違う独特的の雰囲気がある。ツーリング先で彼がレンタルバイクの白いCB750を借りたときは、まるで本物の白バイに追尾されているような、なんだかゾワゾワした感覚に襲われたものだ。

「今のバイクって性能が良いでしよう。みんな知らないうちに、性能に乗せもらっているところがあるんですね。だから、バイクに乗るときはひたすら謙虚に、心のゆとりを持つことが大切ですね」

●やなぎはらみか  
バイク雑誌の編集記者を経てフリーに。交通事故、司法問題等をテーマに多くの遺族の取材を受け、各誌に執筆。『交通事故被害者は二度泣かされる』『自動車保険の落とし穴』『柴犬マイちゃんへの手紙』『遺品 あなたを失った代わりに』『泥だらけのカルテ』『家族のもとへあなたのカカルテ』『家族の言葉』はNHKでドラマ化された。WEBサイトおよびフェイスブックで情報発信中。

「残念ながら、息子さんは衝突の衝撃で内臓に大きな損傷を受け、助かる見込みはありません。どこから出血しているのか特定できいため、もう手の施しようがないのです。いずれにせよ時間の問題で心肺停止になることは避けられません。長くてもあと10日から2週間でしょう。万一千のとき、延命措置はどうしますか……」

佐々木さんは深いため息をつきながら振り返る。

「医師からそう言われたときは、頭の中が真っ白になりました。本当につかつたのです。

親の気持ちとしてはどんなことをしても命を救つてもらいたいと思うのが当たり前です。でも、医学的に助かる見込みはないと言われたとき、息子にとってこの苦しい状態引き延ばすことが本当に正しいのか、早く楽にしてやる方がいいのか……。どうしても答えが出ないんです。

意識はなくとも、息子の身体に触れる温かいし、髪も爪も伸びる。野郎ですからひげだって生えてくる。目前にいる息子は、間違いなく生きているんです。あとはもつ、奇跡を信じるしかありませんでした……」

朝、いつものように「行ってきます」と家を出て行ったわが子が、その数分

後に自宅近くの通いなれた道路で、まさかこのような事故に遭うなど、いつたい誰が想像できるだろうか……。

「事故が起こったのは、朝8時過ぎだたちとにぎやかに記念撮影をしていたのです。まさかそのとき、息子が遠く離れた仙台で、事故に遭っているとは思いもせずに……」

一足のローファーに  
込められた家族の思い

時間が経つにつれ、事故の状況が少しずつ明らかになってきた。

高校に向かっていた一尋さんは、自宅から最寄り駅まで自転車で移動していった。その途中、道路を横断しようと、時速100キロ以上の速度で近づいてきた軽自動車にはねられたというのだ。

加害者は佐々木さん一家と同じ新興住宅地に住む27歳の男。これまでに窃盗罪などで複数回の服役経験があり、このときは仮出所中だった。

「後続車の証言では、加害者ははのすごい勢いで事故直前に前車を追い越し、前方に息子の自転車を見つけると、今度はクラクションを鳴らし続けていたそうです。(男は)寝坊をしたようで、

自転車には左側から力を受けて大きく四んだ損傷がのこっていた。佐々木さんは、瞬間に衝突から逃れようとした一尋さんの姿が目に浮かぶようだつた。

「私はこの加害者と直接遭遇したことはなかったのですが、彼の危険な運転は近所では有名だったようです。子供たちの通学時間帯にあのように悪質な運転をするとは……。もし息子が事故に遭っていないなくても、運かれ早かれ必ず他の誰かが被害に遭っていたに違いないでしょ?」

それからの2週間は、これまで自分が歩んできた警察官としての人生を根本から問いただされる苦しい日々となつた。

「事故から何日目だったでしょうか、病院で徹夜の付き添いを続けていたとき、妻と娘が『お兄ちゃんの靴の片方がない。どこに行つたの?』『雨で靴が濡れてないかな……。探しに行かな

たなんて、何も知りませんでした」

娘たちの話を聞いて初めて知った、大好きな兄との大切な思い出……。

振り返ってみれば、それまで警察官という仕事を続ける中で、たくさんの遺族から同じようなことを何度も頼まれてきた。

「あるご遺族から『シャツのボタンがひとつないんです』って言われたときには、どうしてボタンひとつがそんなに気になるのか全く理解できませんで、そのまま、それを探すのはおまわりさんの仕事じゃないし、警察に来られるのも困るんです、と……。別に悪い気があるわけじゃない。あたりまえのようにそう言つてしまつたからね。多くの人は警察を信頼し、親切にしてくれるものだと期待しているけれど、おまわりさんは二つの顔を持つていて、司法警察員としての顔、そして、

悪いくことをした犯人を捕まえることで、なくなつたボタンを探すことじやないんです。

でも、遺族にとって、それは違うんですね。自分はこれまで何をやつてきたんだろう……。本当に恥ずかしくないです。

した。すると2時間後、行方不明だった一尋さんの片方のローファーは植え込みの中から無事に見つかつた。

たかが靴、されど思い出の詰まつた大切な靴……。

これまで警察官として、事故や事件で亡くなつた多くの被害者の遺体に触れてきた。靈安室で泣き崩れ、泣き叫ぶ母親たちの姿も何度も目にしてきた。

佐々木さんは、ぎりぎりの精神状態の中で自分の心に問いかけていた。

「ICUで闘っている息子の手を握りながら、なぜかそのことを考えていると、自分が本当の遺族の気持ちだよ。お父さんがこの仕事を、大切だし頑張ってきたかも

しきれないけれど、気づいていなかつたんじゃないの?」――、息子にそう話しかけられた気がしました。愛する家族を失うということだが、どれほどらく悲しいことなのか……。息子の命の期限が刻々と近づいていく中で、今まで接してきた多くの被害者家族と自分が同じ立場になつて初めて、その現実を突きつけられたのです。

突然の事故で家族を失つた人の多くすでに就職が決まり、野球の実業団に入ることが決定していた。制服の採寸もついこの間終わつたばかりだった。まさにこれから、彼自身の新たな人生が始まる矢先だった。

## 警察の捜査だと加害車両のスピードは320km/h!?



「生命のメッセージ展ツーリングクラブ」で訪れた北海道にて。家族を失つた悲しみを心に抱きながらも互いに分かり合える仲間たち。一緒に走るひとときは自然に笑顔にしてくれる(各写真の一番右に写るのが佐々木さん)

すでに就職が決まり、野球の実業団に入る事が決定していた。制服の採寸もついこの間終わつたばかりだった。まさにこれから、彼自身の新たな人生が始まる矢先だった。

「事故の真実を知りたい」と願う。奪われた命が戻つてくることはないと知りながら、少しでも納得できない部分があれば、それを解明したいと必死になる。その思いは、22年間捜査側にいた佐々木さんも同じだった。

「通夜、葬儀が終わり、事故現場に残つていていた実況見分の痕跡や、知りうる範囲の捜査結果をもとに自分で検証し

いの構図になった。当社は何度も現地調査などを行ない、また映像解析のプロのお力を借りし事故の一部始終を記録した防犯カメラの映像から徹底した事故鑑定を行った。その結果、確信をもつて被告人に刑事罰を与えるような過失は存在せず、警察捜査結果の論理には誤りがあるという鑑定書を裁判所に提出した。

捜査側は名だたる鑑定人の鑑定書で応対したが、どうしても生の交通事故現場を知らない鑑定書は理論値を示すしかない。

3月23日午前、仙台地方裁判所第1刑事部で判決公判があり、「被告人は無罪」の判決があつた。裁判所は当社作成の鑑定書をほぼ採用している。

刑事案件について検察官が起訴した案件のほぼ100%は有罪確定の中で、無罪判決は本当に針の穴に糸を通すよりも難しいが、当社鑑定書の信用性の高さがまた一つ裏付けられたものと考えている。

男児のご冥福をお祈りしたいと思ふ。事故でわが子を失った遺族の気持ちが痛いほどわかる。しかし、司法には客観的な証拠から「真実」を見極めてほしい。本当に悪質な加害者のウソを突き止め、「逃げ得」を見逃さないよう

いの構図になつた。当社は度々現地調査などを行ない、また映像解析のプロのお力を借りし事故の一部始終を記録した防犯カメラの映像から徹底した事故鑑定を行つた。その結果、確信をもつて被告人に刑事罰を与えるような過失は存在せず、警察捜査結果の論理には誤りがあるといふ鑑定書を裁判所に提出した。

捜査側は名だたる鑑定人の鑑定書で応対したが、どうしても生の交通事故現場を知らない鑑定書は理論値を示すしかない。

高校時代からバイク好きだった。佐々木さんが18歳の頃は、まさに「80年代のバイクブーム全盛期」。一方、「3

ナイ運動」の真っ最中でもあつたが、そんなことはそっちのけでRZ350を購入し、GパンにTシャツ姿でよく蔵王のワインディングを走りに行つていたという。

「息子は野球、筋のまま逝つてしましましたから、一緒にバイクに乗ることはありませんでした。でも今、ツーリング先で、素晴らしい景色の中を走っていると、息子に一歩近づいたような気がするんです。ふと気づくと、『おまえもこの景色を見ているか?』って、

彼が体験しながら走っているんですよね。彼が体験しなかつた世界を、自分の身体をとおしながら、バイクってこういうものだよって語りかけて……」

あまりにずさんな現実を当事者としての当たりにしたとき、佐々木さんは心底落胆したという。

「交通捜査に精通しているはずの自分でも、いざ自分が交通事故の遺族になつてみるとわからないことだらけでした。ほとんどの人は、ずさんな調査の中身を検証することもできず、またその間違いに気づくこともなく、捜査結果を受け入れるしかないのでしょう。現職警察官の自分でもこうなのだから、一体、一般の人はどうしているのだろうと本当に暗だんだと思いつきました」

このときの驚きが、決意を固めることがあります。佐々木さんは22年間務めた宮城県警を退職した。一尋さんの死から4か月後のことだった。そして、その後立ち上げた会社のホームページに自らの理念をこう書き記した。

「事故や事件を防止するためには、教育が一番大切です。命の大切さ、命を無駄にしないことを幼いときから徹底的に教えるべきだと思います。そのためには、過去に起つた事故や事件の内容を正確に把握し、その情報を生かしていくことが不可欠です。真実が捻じ曲げられたままでは、いつまでたつても本当の対策が取れないのではないかでしょうか?」

佐々木さんはこうも唱える。「事故や事件を防止するためには、教育が一番大切です。命の大切さ、命を無駄にしないことを幼いときから徹底的に教えるべきだと思います。そのためには、過去に起つた事故や事件の内容を正確に把握し、その情報を生かしていくことが不可欠です。真実が捻じ曲げられたままでは、いつまでたつても本当の対策が取れないのではないかでしょうか?」

佐々木さんはこうも唱える。

つい先日、自動車運転過失致死罪で起訴されていたドライバーが佐々木さんの鑑定によって無罪となる事案があった。刑事裁判で被告人が無罪となるケースは全体の1%といわれているほど過酷な闘いだ。しかし、死亡事故に痕跡を読み取る交通事故調査の必要性と職業倫理を見つめ直し、交通事故の道を歩むことにしました。依頼者に有利不利を問わず、客観的痕跡による事実とその事実記録書類を比較整理した調査結果を報告いたします。佐々木さんはこうも唱える。

以下は、日本交通事故調査機構のブログに佐々木さんが書き込んだ裁判報告だ。

「2013年10月、宮城県多賀城市の市道で、当時小学1年生の男児が乗用車にはねられ死亡する大変痛ましい交通事故が発生した。当社はこの事件に関して、『被告』となつて起訴された自動車運転手側から事故鑑定の依頼を受けて取り組んだ。

法廷では、被告に事故の過失を追及し刑事責任を負わせようとする検察官と、元宮城県警察交通警察官の主張争っている。

謝罪は特になかつた。しかし、仮に彼が自宅へお参りに来たとしても、家には入れたくないという気持ちもある。

「加害者には二度とこのよくな事故を起こしてほしくありません。そのためにも、私がメディアに出て交通事故の問題を語ることで、それをどこかで彼が見ていれば何か伝わるのではないかという気持ちもありますね」

一尋さんのお墓は、自家から車で1時間ほど離れた宮城県の登米市にある。佐々木さんは先祖代々続く墓石の横に、石のモニュメントを作つた。

「一緒に過ごせたのは、わずか18年という歳月だつたけれど、心の底から、生まれてきてくれたことに感謝の思いを込めました」

野球のボールをかたどつたそこには、「ありがとう」という文字が刻まれている。



小学生の頃から甲子園をめざし、野球ひと筋で練習に励んできた一尋さんは、やはりこのユニフォームが一番似合う(高校時代の写真から)。無限大の未来に、たくさんの夢と希望を抱いていたに違いない……。



テレビに生出演しコメントする佐々木さん(2015年8月26日放送・テレビ朝日「ワイド!スクランブル」)。この日は神奈川県葉山町で発生した飲酒運転による3人死傷ひき逃げ事件がテーマだった。悪質運転に対する憤り、適正処理への願い、そして、自らが公で発言する姿が、一度も謝罪を受けたことのない一尋さんの加害者の目にどこかで触れることがないながら……。